

<特集> 緒方洪庵生誕 200 年前々夜

洪庵の直系 5 代目 緒方惟之氏に訊く

江戸末期の医師で、大村益次郎、福沢諭吉らを輩出した「適塾」の創始者、緒方洪庵(1810～1863)の直系 5 代目の子孫・緒方惟之氏(83 歳、奈良市在住)が、緒方家 5 代を紹介した著書『緒方家五代 医の系譜』(燃焼社刊)を出版した。今回の特集は「緒方洪庵生誕 200 年前々夜 II」として、洪庵の玄孫にあたる緒方惟之氏にインタビューを行い、5 代目であるご自身の幼少期からこれまでの人生、高祖父である緒方洪庵のこと、緒方家直系が受け継いできた医の系譜などについて語っていただいた。

(聞き手：生産技術振興協会編集部・大戸修二＝フリーランスライター)

● 緒方家 5 代をまとめた著書『医の系譜』

<昨年発刊された『医の系譜』には、緒方家初代の洪庵から、惟準、銈次郎、準一、惟之さんまで直系 5 代の歩んだ道が、日本の歴史背景を含めて分かりやすく描かれています。1 冊の本にしようとしたきっかけのようなものから話してください>

父(準一)を含め私たちは、医者の家だから医者を継ぐのだという感じで過ごしてきて、じつは洪庵のことをあまり意識することはありませんでした。私の叔父、富雄が『緒方洪庵伝』(第 1 版・昭和 17 年刊、第 2 版・昭和 38 年発刊)を書いたときも、私自身は「歴史の好きな叔父さん」という程度にしか感じませんでした。しかし、私には子どもがいなかったため洪庵の本家としての血が途絶えることになるわけで、直系の緒方家 5 代に関する何かを残したいと思うようになりました。また、周囲のいろんな方々からも本として残すべきという助言もあり、書こうと踏み切ったわけです。その場合、まずは自叙伝として自分自身の生い立ちを書く。先祖代々のことは、書籍など過去の文献もかなりあるから、それらをあらためて調べなおして、緒方家 5 代としてまとめた本にしようということになりました。



緒方 惟之 氏(おがたこれゆき)

大正 14 年(1925 年)4 月 1 日、東京に生まれる。神戸市で幼少期を過ごし、天王寺中学から東京慈恵会医科大学へ進み、昭和 27 年卒業。医学博士。
奈良県立医科大学、国立奈良病院、大阪警察病院勤務を経て昭和 58 年、緒方整形外科医院開業。大阪大学適塾会理事。

● 住吉のわが家 やんちゃばかりの子ども時代

<惟之さんご自身の幼い頃は、手のつけられないような「ガキ大将」だったということですが>

小さい頃は兵庫県住吉村呉田浜(＝現神戸市東灘区)に住んでいました。わが家は緒方家 2 代目の惟準が開設した緒方病院の別荘として建てたもので、住吉の海に面した 300 坪の敷地にテニスコートを設けた広い庭がありました。私が小学生時代の昭和 10 年頃には大阪湾で軍艦による観艦式が時々行われ、軍艦の艦載機が飛んできて海上に着水すると、垣根を外した庭からテニスコートに入ってくるということもありました。家は塀に囲まれていたので、塀の上によじ登り、「どやっ」と手を広げて自慢してみせたり、勢い余って塀から落ちたこともあります。また、近所の子どもたちを塀の前に並べて、小さな金槌でおでこを順に軽く叩いたり。そのことで、たんこぶをつくった子の親がわが家に怒鳴り込んできたこともありました。

正月には、塀の外側の道を歩く着飾ったお嬢さんに狙いを定めて、火をつけた爆竹を爆発寸前に投げて、悲鳴を上げて驚くのを喜んだこともありました。いまだに後悔していることとして、猫を井戸の中に投げ入れたり、犬を海に投げ込んだりもしました。その後に悪いことをしたと後悔し、教会に行って牧師さんに懺悔をすることになりました。

● 床下には洪庵書物の版木が積まれていた

わが家にあった刀を持ち出して、木を斬ったり削ったりしていました。今はどこにいったのか分かりませんが、振り返って考えると、その刀は赤い鞘に入っていて、洪庵が所有した大事な刀だっ

たのかもしれませんが。家の座敷の床下にもぐりこんで遊ぶことがあったのですが、そこには版木がいっぱい積まれていました。ずっと後になって分かったことですが、それらは洪庵が生前に出版した書物の版木だったのです。戦争が激化する中で疎開し、家は大空襲で焼けてしまいました。版木の中の1枚を叔父の富雄が『緒方洪庵伝』を出す際の資料として持ち出していたので、かろうじて伝承することができたわけです。

中学生時代だと思いますが、近くの別荘に来ていた女の子と、私の妹の3人でボートに乗って神戸港まで行ったことがあります。当時、神戸港は目と鼻の先のように近くに見えました。捕鯨船が停泊していたので、その船体をぐるっと周ってから帰ってきたのですが、時間はものすごく経っていたわけです。ボートが転覆してしまったものだとか心配していた岸の人たちは、私たちが無事に帰ってきたことに胸をなでおろしたものの、親からはものすごい剣幕で怒られ、当然のように門の外に放り出されることになりました。親の心配をよそに、子どもの頃の私はやんちゃばかりをしていました。

● 中学時代 滑空部に入る

< 中学生時代は、飛行機に乗ることに夢中になっていたようですね >

昭和14年4月に天王寺中学に入学し、初めは水泳部に入ったのですが、滑空部(グライダー部)ができるというので、飛行機に興味があった私は真っ先に滑空部に入部しました。練習は大阪市平野区のトウモロコシ畑のある野原でした。そこでグライダーを組み立てて、「これから搭乗します」と教官に敬礼して乗り込んだものです。当時の記念写真が手元に残っていますが、写真の裏にペン字で昭和17年4月18日と書かれていますから、戦争が始まりだした頃でした。グライダーをバックに滑空部の部員が前に座り、その後ろに先生方が立っていますが、その中の軍事教官が正面を向かず右手の空を見上げた姿で映っています。写真を撮る丁度そのときに、大阪港方面で空襲警報が鳴り出していたため、気が気ではなかったのだと思います。滑空部時代の仲間で、80歳を越えた今でも気楽に話し合える親友が二人いますが、当時の思い出話が尽きることはありません。



「これから搭乗します」と教官に敬礼する惟之氏(右端)



天王寺中学滑空部の記念写真

● 医の道へ 先生の一喝で目が覚める

< グライダーに乗っていた当時、自身の進路として航空隊に入ることを思い描いていたのですか? >

戦時中ですから、自分は航空隊に入隊して飛行機に乗ると決心していました。中学5年生になった昭和18年、「航空隊に志願する者はいないか」と問われ、私は真っ先に手を上げました。手を上げた数人の中から私だけが教員室に呼ばれたので、てっきり自分が選ばれたものと思い込んでいました。ところが教員室に入るなり、「緒方、お前はいったい何を考えとるのか! お前とこは先祖から代々の医者やろ。医者になるのが普通と違うんか!」。先生の大声は、先祖のことが胸に突き刺さってくるような強烈なもので、私は進学する気持ちになりました。この一喝で、私は目を覚まさせられたのです。

● 東京での学生時代 終戦を喜ぶ

< 医者の道を目指すため、その後に東京の慈恵医科

大学へと進学し、東京での生活が始まったわけですね>

当初は京都の三高受験も考えたものの、三高を受験して落ちてしまったら兵隊にならないといけない。非国民的な発想なのですが、戦争に行きたくはなかったわけです。ならば割と合格しやすい東京の慈恵医大に行こうということで、昭和19年4月に東京慈恵医科大学予科に入学しました。その年の11月以降に空襲が始まりました。私は大森の叔母の家に下宿していたのですが、昭和20年3月の東京大空襲の時、焼野原となった吉原辺りまで出かけ、炭のように黒焦げになった遺体が散乱するという悲惨な状況を目にして、帰ってきました。医学生のものでできなかったのですが、医者の気持ちにはなっていました。

戦況の悪化にともない、栃木県の益子に疎開。8月15日、正午に何か重大な発表があるということで、お寺の庭でラジオから流れる天皇陛下のお声を聴きました。初めは何のことだか分からなかったのですが、そのうちに終戦を意味する内容だと分かり、これで戦争が終わったのだと私はうれしくてたまりませんでした。東京に戻り、予科での勉強が始まりましたが、道端に焼夷弾の筒が刺さっていたので抜いて持ち帰り、しばらくの間はその筒を尿瓶(しびん)代わりに使っていました。

●天使のようなペギー葉山との出会い

焦土と化した東京のあちこちには次々と闇市が立ち出し、そのうちにジャズが流れ、戦時中とはまったく違う街へと変わっていきました。友達連中でダンスを習いに行き、新橋のフロリダというダンスホールに踊りにも行きました。フロリダでは、渡辺博とスターダスターズの演奏をバックにペギー葉山が歌っていて、私の目には天使が舞い降りてきたように映りました。ペギー葉山に一度会いたいと思っていましたが、60年後に神様が偶然の機会をもたらしてくれました。平成19年3月、大阪シンフォニーホールのコンサートとその後の奈良・薬師寺のコンサートで、楽屋に呼んでいただきました。ペギー葉山は田園調布に住んでいて、私の叔父、緒方安雄も田園調布に住んでいたということで、叔父のこともご存知だということでした。

●博士論文のテーマは運動生理学

<大学卒業後に大阪へ帰ってきたわけですね>

大学の教授からは東京に残らないかとも誘われたのですが、父から帰ってくるように言われ、昭和27年4月から奈良県立医大でインターンをすることになりました。1年間のインターン時代を経て衛生学教室に入局。博士号を取得したのは入局5年目で、博士論文は運動生理学をテーマにしました。生来、スポーツ好きの私はスポーツ医学に興味があり、昭和36年4月からは整形外科の勤務医になりました。

●警察病院時代 中国卓球選手と出会う

<スポーツといえば、大阪警察病院勤務時代に、日中友好のピンポン外交にまつわるエピソードがあったそうですね>

昭和47年5月に中国卓球代表団が大阪に来て、有力選手の一人、李景光が利き腕を負傷して困っているということで卓球練習場に呼び出され、李選手の腕の具合を診てやりました。シップ薬などを渡し大丈夫だと元気づけたのですが、翌日の毎日新聞には、私が診察する姿の写真と『日本の医師も友好スマッシュ 緒方洪庵のひ孫 負傷選手を手厚く』という見出しの記事が掲載されました。ひ孫という表記だけは誤り(=玄孫が正解)でしたが、書かれて悪い気はしませんでした。

●整形外科と心

<奈良県立医大と大阪警察病院で整形外科医として携り、定年後の昭和58年2月に奈良で緒方整形外科医院を開業されました。医院は平成18年10月まで23年間続けられたということですが、『医の系譜』の中に、整形の病気と患者の心の関係について触れています。病と心の関係を少し説明してください>

肩がこって痛く、いつまで経っても痛みが治まらないという女性の患者が来られたのですが、レントゲンを撮ってみても変形もない。そこで患者さんに家庭の事などいろんなことを聞いてみたら、そのうちに彼女は涙を流しました。時間をかけて本人の正直な思いまでを聞いてあげ、あらためて「肩の痛みはどうか」と聞くと、「なおりました」と言われました。この患者さんの場合は、家庭の事情が肩こりに影響していたわけです。人の血流をつか



洪庵の肖像画を背にした三代
(右二代惟準、後三代銈次郎、左四代準一)

さどっているのは間脳で、間脳は無意識の中で動いて、ストレスがたまっていくのも間脳の働きに関係しています。話を聞いてあげること、間脳にいい影響を及ぼすことで血流もよくなり、肩こりも解消するということがあります。

もう1つの事例ですが、レイノー氏病(=足の指が紫色になり、放置しておくとう腐敗して行く病気)で私の所にやってきた女性患者がいました。その患者さんはある病院で診てもらったところ、左足の太ももから切断しなければならないと言われ、義足まで見せられたと私に話されました。ちょっと待てよと、その病院に電話をして手術するのをやめてもらい、私のところで診ることにしました。患者さんに聞いてみると、親も同じ病気が元で足を切断しているから、自分もいずれそうなるのではないかと思います。悩んでいたということです。それから私は、患者さんに対して丸1年間、催眠術をかけて暗示を続けたのですが、日が経つにつれ紫色もとれて症状は快方に向かいました。彼女は当初スリッパを履いて通っ

てきたのですが、最後には靴が履けるようになり、非常に喜ばれました。

● 診察の基本 触診の大切さ

< 医者としての長い経験を通して、社会や医学・医療の世界に伝えたいこと、強調したいことはありますか？ >

病院に行って多くの方が感じられていることだと思いますが、診察室に入ると医者がパソコンの画面を見たまま患者からの話を聞いて、入力しながら「お薬を出しましょう」。最近はそんな診察風景が多くなっているのではないのでしょうか。私は、患者の体を触らないまま対応するような医者ではだめだと思います。問診をし、聴診器をあて、触診をする。それが医者としての診察の基本であり、患者にそれをしてあげないというのは間違っています。23年間の整形外科での診察で、私はずっと患者さんの体を触ってきましたが、その間にどれだけ整形外科分野と違う患者さんに出会ったことでしょうか。子宮筋腫、腎炎、腫瘍というように、そんな人がいっぱいいました。触診するからこそ分かるわけです。

● 医師への戒め「扶氏医戒之略」

私が世の中の医者に伝えたいことは「医の世に生活するは人の為のみ。己のためにあらずということ。を其業の本旨とす」。洪庵が記した『扶氏医戒之略』(江戸時代に緒方洪庵が門人に教えた、医師が守るべき戒め12箇条)に書かれていることが大切だということです。私の父、準一も奈良県立医大1回生への最初の講義で『扶氏医戒之略』について話しましたし、私は今年10月に開かれる岡山整形外科学会の研修会に講師として招かれていますので、研修会ではその話をしようと思っています。『扶氏医戒之略』に記されている医師への戒め事項は、緒方家の中では代々受け継がれていて、それは医者の家系として自然に身についてしまっている「座右の銘」のようなものといえます。

● 医者は相手の身になり考える

< 洪庵のことは『緒方洪庵伝』(緒方富雄著)をはじめ、多くの書物などで紹介されていますが、洪庵に通じることで強調されたいことは何ですか？ >

世の中には多くの学者が出ていますが、自分の名



適塾公園内にある緒方洪庵像（銅像製作の際には、洪庵の骨格に最も似ているということから、惟之氏の頭部を360度撮影して参考にした）



適塾（大阪市北区北浜3）の正面

誉や名を売りたいがために出る医者や学者が案外に多いものです。医者は相手の身になり、その家族、親戚までを含めて考えていかないと、原因がどこにあるのかが分からないことになります。それだけのことは把握しなければいけないと思います。やっと今になって日本医師会が同様なことを強調するようになりましたが、相手のことを思いやるというのは、洪庵の時代の昔から当たり前のことだったと私は言いたいですね。

● 適塾のこと

<洪庵は医者であり、蘭学者であり、教育者でありました。適塾で学んだ適塾出身者は、幕末・明治の時代にかけて政治、経済、文学など多くの分野で活躍し、世の中に大きな影響を与え、近代化へと進む日本を支えていきました。洪庵が開設した適塾について、少し触れていただけますか？>

洪庵は医者でしたが、適塾では医学でなく蘭学を教えたわけです。蘭語を学び、蘭学書を読めるようにするのが目的でした。塾生たちが奪い合うようにして手に取ったという「ズーフの辞書」は、蘭語の辞書だったのです。焼失する前のわが家には、蘭学に関する本がいっぱいありました。船、軍艦や大砲の絵、蝶の絵などが描かれている蘭学書。造船学、工学、医学、政治学、経済学などの蘭語で書かれた専門書の中から、塾生たちは興味のある分野の知識を吸収しようと、必死になって勉強したということです。私は大阪大学適塾記念会の理事の一人ですが、記念会では洪庵の命日にあたる6月10日の前後に

毎年「適塾の夕べ」を開催しています。その時にはいろんな専門分野の先生方を招き、文学や現代科学など幅広い分野の講演をしていただいています。

● 惟準は阪大創設、準一は奈良医大創設

<洪庵、惟準、銈次郎、準一、惟之という緒方家直系5代は、どなたも医の道を歩んできたのですが、その人生には微妙な違いがあるようですね。著書『医の系譜』に詳しく書かれていますが、2代目以降の方々について少しだけ触れてください>

ご存知のように2代目惟準は大阪大学医学部を創設しました。3代目銈次郎は緒方病院を拡張するなど隆盛期を築いたが、妹の嫁ぎ先の造船事業に資金援助をするうちに事業が破綻、そのあおりから緒方病院を整理することになってしまいました。私の祖父、銈次郎のことは『医の系譜』にも詳しく載せていますが、波乱万丈の人生だったといえるのかもしれませんが。そして銈次郎の弟、知三郎は東京大学病理学名誉教授、章は東京大学薬理学名誉教授になりました。知三郎は手品が好きで、東京の手品関係団体の会長もやっていました。私の父である4代目準一は奈良県立医科大学創設に中心的に関わり、医大退官後には俳人氷菓として俳句に打ち込みました。私の叔父、安雄は今上天皇の侍医であり、富雄は血清学の権威であったとともに、歴史が好きだったこともあって『緒方洪庵伝』を執筆しました。

● 最近の諸問題に思うこと

<洪庵生誕から200年。今の医学界では医療技術の

進歩を含めて大きな変化が見られます。一方で遺伝子操作の問題や医者不足の問題など、いろんな歪(ひずみ)も表面化しています。洪庵がこの世に生きていると仮定したら、どんなアドバイスが想定できるのでしょうか。最後に直系5代目の惟之さんとして、最近の諸問題の中で何か感じられていることはありますか？>

医者の心構えについては先ほど話しましたが、医者が少なくなっている最近の現象には、患者さん自身の医者に対する思いや認識度が、変わってきていることが影響しているのではないかと思います。「おまえ、なんや、もっとはつきりせんかい」。こうし

た発言を含め、患者さんの医者に対してのえらそうな態度が目立ってきたように思えます。たとえ若い医者であったとしても、医者としての的確な対処はできるはずで。罵られるような発言が日常茶飯事のようになれば、医者としてこんな病院には居れないとやめていくわけです。患者さん自身も自分の体を診てもらうのだから、医者の身になって考えていただきたいと思います。えらそうに言い過ぎると、逆に病気にもなりかねません。

医者は医の道を勉強してきているわけですから、医者として立て、尊敬してあげることも患者さん側に必要なことではないでしょうか。



1862年(文久2年)8月幕府の強い要望で幕府の奥医師兼西洋医学所頭取として、江戸に召し出されたが、わずか10ヵ月後の1863年(文久3年)6月江戸の頭取屋敷で死去した。享年54歳であった。

提供：株式会社 吉澤石材工業所



龍海寺は逢來山と号し、曹洞宗のお寺である。緒方一族の墓のほか、緒方洪庵の師である「中天游の墓」や、門下生の「大村益次郎の足塚」がある。

提供：株式会社 吉澤石材工業所



中天游(なかにんりゅう)は、江戸時代の蘭学者である。1782年(天明2年)に生まれ、「適塾」を開いた緒方洪庵は、1825年(文政8年)から前後4年間にわたり天游の教えをうけた。

提供：株式会社 吉澤石材工業所